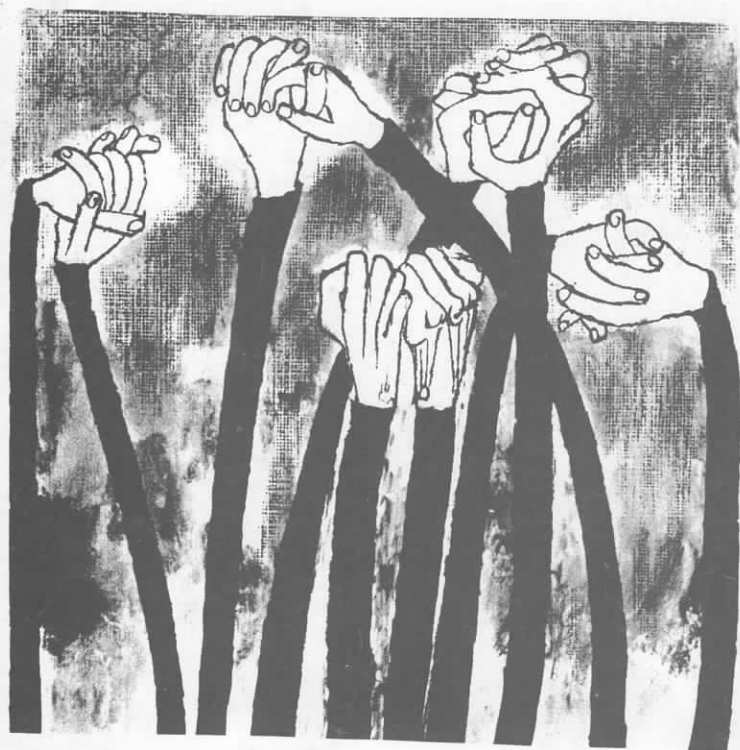


勤行樓直



N-KO SOMERO 1976

WRI • JAPAN



W R I 日本からのよびかけ

ベトナム戦争の終結とともに、反戦の声は下火になったようです。しかし私たちの日常をとりまく支配の状況は、あまり変わったとはいえません。それどころか反戦運動が小休止しているその間も、国家は不時の侵略にそなえるという名目で、戦争準備をおしすすめ軍備の拡大をはかっています。

いま、このような反戦の退潮期に私たちが運動を守り力をたくわえていくために、W R I の宣言と任務 V が示すものは、きわめて具体的ないくつかの示唆を与えるものと思います。

その意味で、W R I 日本は、反戦運動のあらたな方向として、また個人でもなしうる運動参加への途として、このよびかけをすることにしました。

あなたが、このよびかけに応じ、W R I 日本のメンバーまたは支持者になって下さることを切に期待します。

戦争抵抗者インターナショナル日本部

私と非暴力

“非暴力反戦行動”とぼく

坂井龍彦

- ☆ 非暴力反戦行動とぼく
- ☆ 現代暴力論ノートを讀んで
- ☆ ぼくとW R I 宣言
- ☆ 狼たちについて

私が非暴力という言葉運動用語として知ったのは大學生の時だ。そして大學五年生のときから非暴力反戦行動というグループの集りに出るようになった。

ちよっとしたきっかけで、一度だけ集会にゆき、その後も根氣よく案内やニュースを送りつづけてくれたいたので、ついに参加するようになったわけだ。

とはいえ、個人として“非暴力反戦”という言葉は好きだった。暴力というか、実力というか―私はあまり好きじゃない。

その頃、大學ではゲバ棒や投石なんかが横行していた

が、抵抗としてのそれは認めたいが、
どうも抵抗として実力をもつことの
中
に、すでに暴力というか、権力への芽
生えがあるような気がしてならなかつ

た。やっぱりゲバ棒を持つことでヒロイズムを感じる。
自分はやっているんだというようになると、自分が他
の者より偉くなったように感じる。共感するところも大
だったのだが、そういう危険を感じたので、いわゆる新
左翼の仲間入りはしなかった。しかし仲間といえは仲間
であつたわけで、會議に出たりはしていた。

ただ行動を、ある部分までしか一緒にできなかった。
そんなところから、私は非暴力反戦という言葉とグルー
プにひかれていったのだ。

もうひとつ、私の個人的体験からいうと、暴力、ある

いは非暴力でもいいのだが、「力」というものは、いやだという気がある。

たとえばケンカ―個人的な暴力だからあまり問題とはならないかもしれないが―私は権力に対する憎しみというか、いやだという感情の根っこには、個人的暴力に対する憎しみがある。小さくても大きくても根は同じだと思ふのだ。私にとって、不正なことはよくないのだ。

よく電車で並んでいると、横入りする人とか、人をつきとばして歩いたりとか、力で人をおさえつける人がいるが、とてもいやだ。

結局、軍備とか戦争というの也要するに不正なことを力でおしとおすということにおいては同じなのだ。

ちよっと話がそれるが、私のケンカの体験をふたつあげると―ひとつは、不正なことに対して私自身が向かっていった時。これは、中学一年のころで、まだ新入生のころだった。多分相手がなにかいちゃもんをつけたみたいなこと、私とケンカになった。相手というのは、あいつとは、かわりになるなと忠告されていた子で、彼は暴力団の一員だからあぶないといううわさだった。

私としては、そんなことは聞かされていたが、ガマンできなくて派手なケンカをした。数少ない体験なので、今

でもよく覚えてる。結果は、どうでもいいんだが、まあ引きわけで、あとでけっこう仲良くなったたりした。その子もさびしかったようだ。だから色々なんくせをつけては威張っていたのだ。それが私の正義感―狭い意味での、つまり社会的背景などをまるで考えない―とぶつかったというわけだ。

ふたつ目の体験というのは、私自身がやったのではなくて、見たケンカ。これも派手で、しかも結果は凄惨だった。やられた方の顔は白くて、赤くて、どこが目やら鼻やらわからないくらいだ。

これは、私が高校二年の時、野球の練習が終って一息いれていると、隣の陸上競技場で、そのケンカがはじまった。とにかくひでえなあ、こわいなあというのが私の印象だった。やつつけた方が私の小学校時代の友人だったこともあって、よく覚えてる。この友人は、このケンカで高校を退学になった。やられた方の両親が彼を訴えたからだ。

このふたつの経験からいえることは、「力」をふるうということ、悲しい結果をもたらす―ということ。

しかし、不正なものには「力」をふるってでも立ち向かった―ということだ。

今でもこのふたつながら正しいと思っている。矛盾もあるのだが、ここらへんから戦争や、それを引き起こす権力への憎しみ、そしてそれへの闘いという私の生き方が出てきている。

だから「私の非暴力」というのは、不殺生、不服従というやり方に対する希望や賛同を含んでいるが、他方、

ゲバ棒や、爆弾も否定しきれないという、あいまいもこのいうところにある。

自分の心がゆれ動く中で、これはまちがいが無い、自分として出来るんだという行動がいくらでもあるので、とにかく少しでもそれをやっていきたい—そういう意味で、「非暴力」というのが僕の生き方を律している。

現代暴力論ノートを読んで

たけ宣慶

活字になった「現代暴力論ノート」を読んで（再読して）たいへんショックを受けた。初読の時、見すごしてしまい、何年かの試行錯誤の後、やっとわかったな、と思う問題が、すでに鮮明な形で提起されていたからである。

△共同体V運動は「日常生活のレベルで、△権力に對置する非権力としての生活空間Vを創出しようとするもの」で、「日常生活の革命運動化、革命運動の土着化」を意味する。闘争の△根拠地V△生産点V△出撃基地Vとして、△遊撃作戦Vや△補給、休息、待機の場Vとして、「△共同体Vはすべての闘争現場に密着して、つく

り出されることが必要である。」

さらに「前衛性の確認」が「きわめて重要な視点」とされる。そのような共同体は、「少数前衛の、日常生活の基盤」「闘争の土着」「一般大衆にひらかれたトレーニングの場」「新しい質の闘争形態を創り出すもの」等々の意味をもっている。

今、私は、教人の仲間と、自衛隊解体の運動を、「連華庵」という共同体の萌芽、バザー等の一般大衆との交流、といったことをも含めながら行っている。「既存のものとは違うんだ」という自負はあるが、それだけに先の見通しをたてるのが難しい。「ノート」の柔軟な提

起を、さらに柔軟な発想で柔軟に適用して行きたい。

「ノート」は、長年の運動体験の積み重ねから生まれたものである。こちら側に、実践の備えがなければ、内容の良さは伝わってこないだろう。四年前の私がそうであった。「ノート」の中味が多少わかるまでに成長したのだな、と喜んでいる。

「ノート」は△未完△である。労働者の△自主管理△の問題について、言いたらないような気がする。市民運動と労働運動についての箇所が、ますます新鮮さを感じさせる時期になっているだけに残念である。

『暴力闘争か、直接行動か』という時、前者が労働者の△武装△であるならば、後者は△自主管理△ではないだろうか？これは、私の質問である。

「国家に対して△暴力的闘い△をすゝめることで、ふたたび△国家という暴力機構△にとらえられてしまうという△悪循環△」の故に、対抗暴力は否定される。しかし、「少数前衛の起爆的な、△暴力的△に一見みえる闘争があらわれて来るをえない」その△対応暴力△は、「△直接行動回復―生産労働奪権△において、本質的に△非暴力△を指向するものであり、暴力闘争と同質のもの

のではない」、人民の側の△疑似暴力△、「△限定的△△条件的△△状況的△であり、その本来において△生産と労働△を指向するものとして、つねに△非暴力△へと収斂するもの」、△自己否定的暴力△である。

「一見まぎらわしい――このことを区別する決定的な基準は△その行為が根本的にどのように生産労働と関連し、かつその防衛、確保とむすびついているか△である。その暴力行使がどのように△求心的に生産―労働に向いているか△である。」

だが、△自己否定的暴力△を主張しない対抗暴力があるだろうか？他の箇所では、「非暴力は、物理的でない△力△」とされているが「物理力」にはちがいない△対応暴力△が、圧倒的な体制暴力の前に、エスカレートしてしまうのではないのか？

「ノート」は、「宗教的、信条的な」非暴力については否定的であるが、「物理力でない△力△」の根源を宗教に求める私には、△対応暴力△云々の問題は納得がいかない。暴力の行使が人間の心に及ぼす影響を考えると「指向」云々だけで、エスカレートの歯止めになるだろうか？

宗教信仰者である私は、△疑似暴力△によらず、「物

理的でない「暴力V」「暴力に対応する「異質の領域から
する対応V」を最後まで貫徹するところに、非暴力の可
能性を求めたいのである。

(WRI・市川)

ばくとウリ宣言

長谷川修児

のは、自らは戦わない。彼らは戦争で死
なない。私達の本当の敵は戦争の外にい
る。」といったことが中心であったと思
います。

もう大分まえのこと、A遊撃V3・4号で：次集17集
からは「反戦争詩集」として出すと予告したところ、K

さんから次のような投書がありました。

「……この題には考えさせられます。世界中の人々の
抑圧からの解放戦争はどうなるのでしょうか。私達の言う
「反戦」の「戦」は「戦争」の「戦」ではなく「侵略戦
争」の「戦」ではなかったでしょうか。

私達も「戦」っています。抑圧者に対する全ての戦争、
侵略者に対する全ての武装闘争は正しいのです。

私達の闘いの意義は単に戦争に反対する事ではありま
せん。私の敵とは一体何だったのでしょうか。この事を
一度考えてみて下さい。」

Kさんへの返事をどんな風に書いたか覚えていません
が、「戦争は人民同志の殺し合いである。戦争を起すも

一七集の作品参加をよびかけるなかで、僕はこう書き
ました。

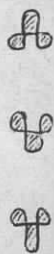
(……今以後第二ベトナム反戦詩集として『反戦争詩
集』の名でその発行を続けます。今までそうであったよ
うに、これからもこの詩集は、正義の戦争、不正義の戦
争の論理をとりません。

一切の戦争の廃絶にむけて、戦争をひき起すあらゆる
根源にたちむかいたいと考えます。

公害、差別、富国家、それら私達を抑圧するものを克
服していこうとする、この作業に沢山の方々の参加を心
からよびかけます。)

WRI日本の宣言の1.を戦争に対する僕の考えの基本
とすることが出来ます。

私達は日々のくらしに暴力を必要としていないし(た



とえ疑似化していようとまいと)まして、戦争をひき起すなんらの理由も原因も持っていません。それらは他からやってきて、人民を支配し、煽動する。

戦争をひき起すものは、それ自身決して戦わない。死なない。肥えるだけです。それは戦争の勝敗に関係なくそうです。人民の敵は戦争の外にいます。そこから人民相互の憎悪をかきたて、貧しさをかきたて、戦争エネルギーをひき出していく。

正義の戦争、不正義の戦争というかたちの戦争肯定の論理はそうした事からの上で成立します。正義・不正義などという理由づけは、どうにでもつけられるもの、戦争は始まってしまえばそれまでなのです。

そうであるなら、それを成立させている土壌をかえることが必要でしょう。人間が人間を支配する、管理するという(町内会から国家まで)すでに私達には常識になってしまったこの仕組みを取りはずすということ。(その意味で私達は、倫理においても著しく墮落してしまっています。ロッキード事件は高官たちより、私達自身の墮落をより鋭く証しているように僕は考えます。)

ベトナム戦争だって同じだった。アメリカという超強大(権)国が、ベトナムの少数の支配層を支配すること

でベトナムを支配しようとしたのだし、もちろん、それには核兵器をのぞくあらゆる新型兵器をもちこみ、六十万に及ぼうという兵員を投入していったのですが。

それはアメリカの人民にとっても強制される戦争でありますけれど、ベトナムにとって、これ以上に強制される暴力はないのではないか。ベトナム人民にとってベトナム戦争が解放戦争であったことを僕は否定しようなど考えませんが。しかし、本来非暴力の日常から引離されて暴力の日常を強制されていたことにかわりがない。それでも私達は解放戦争を支持する、正義の戦争は許されるときっぱりと言いきれるかな。

反戦運動といったって、やり方はいくらでもあります。Kさんなら義勇兵として参加することも、あるいは反戦運動のかたちとして可能かも知れませんが、そのような選択肢のあることを否定しません。ただ僕はそれをとらない。

戦争という最大級の組織暴力を強制している源と、それにつらなる多くの事物現象をつぶしていくことに力を注ぐ。それらについても又、WRI日本の宣言2を僕は僕の行為の基本におくことができます。

ベ平連運動がベトナム反戦として、切り開いた運動の

ダイナミズムも、そこにあったと思います。

軍隊という暴力組織は、たしかに人民によって成立っています。しかし、人民それ自身が戦争をひき起すのではないし、国家とか富とか経済とか、それにかゝわる権力機構、組織の維持と動向に軍隊が必要とされているにすぎないなら、それはすみやかに解体されることが人民にとり、そのくらしにとって、いちばん自然であるのはつきりしています。

一部分の武装は不平等であるから、人民総武装こそ望ましいというのがあります。人民総武装は、世界各国の

“狼たろ”について

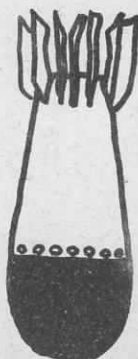
野坂青矢

「私の非暴力」は、「東アジア反日武装戦線」について書いているところ、すこしひっかかりを感じました。

ぼくとしてもアジアの人びとのギセイの上で成り立っている、にほん社会の中で生活しており、半侵略国家の息子の一ひとりとして存在していることをリクツとして知っていて、やはり、このありようを何とかしたいと思うわけですが、自分の中で、これだ／＼というものをつかめ

核武装と同じ論理であって、そこには絶滅以外の何ものもうまない。

W R I日本の宣言3.をも、僕は僕の行為の基本として選択することができます。



ておらず、まだ何ひとつ具体的には動いていない状態で、このにほん社会を何とかしようとして努力している、さまざまな個人、さまざまなグループの行動に対して、とやかく言うつもりはないし、又言えるとは思いません。

ですから、ふうさんが『自分自身の闘いの姿勢を問題にしないで、非暴力主義の名をもって、彼らを非難、糾弾するやり方はやめたい』というのはわかります。たとそれでもやはり、どんなに激しく行動する個人やグループでも、又どんなにゆるやかに行動する個人やグ

グループでも、お互いにそれぞれの行動に対して、批判する自由はなくてはならない自由だと思うのです。

ふうさんの文章がこのことを否定しているとは思いませんが、『自分を被害者の立場におくだけの視点では、『東アジア反日武装戦線』とは真向うから対立する。それは彼らと敵対し、権力やマスコミと同調する他ない途である』と言うことによって、彼らの行動を批判することも封じてしまうようなところがあるように感じてしまいます。もし私たちが、あるグループや個人が反国家、反権力の立場に立つからという理由で、そのグループや個人のどんな行動に対しても批判すべきでないとしたら又そのグループや個人がそれを当然のこととして受け入れるのだとすれば、そのグループや個人はそのまゝ権力になっってしまうでしょう。

「東アジア反日武装戦線」については、新聞で読んだ程度でくわしいことは知りません。このにほん社会と自分自身のありやうを何とかしようとして行動をおこしたグループのひとつだということはわかります。

たゞあの行動の中で何人かの人間が死んだわけですが、その死んだ人たちのことは、彼らの中ではどのように考えられているのでしょうか？北海道庁爆破も「東アジア

反日武装戦線」の名前が使われているようですが、侵略国家の国民だから死んでも仕方がないのだという考えで、あのような行動があるのだとすれば、僕としてはやはり「東アジア反日武装戦線」の行動を支持することができず、肯定することはできません。僕の中では「東アジア反日武装戦線」とは対立してしまいます。

もちろん彼らの行動が肯定できないからと言って、彼らが権力のほしいままになってもよいとは思いませんが、積極的にかゝわろうという気持がわいてこないのも又事実です。

そこで問われてくるのは、では私自身はどうするのか、ということですが、最初にも書いたように、まだ何一つ具体的なものを見い出すことができていません。たゞ希望として言えることは、この日本社会を血を流すことなく非暴力によって、変えていくことは、たとえ不可能であるにしても、その可能性を最大限追求することを怠たる必要はどこにもないわけだし、その可能性を追求していきたいというのが、今の僕の気持です。どんなにゆるやかな非暴力であれ、あるいは消極的な非暴力であれ、それを貫くことができるなら、それで充分だという気がします。